

おかえりなさい 故郷へ

～農村民泊が愛される理由～

森林文化Ⅱ 5年 甲斐 穂乃佳
担当教諭 牧野 亮司

1、Abstract

The farmhouse accommodation in Kuwanouchi district ,Gokase town, is loved among many people. I wonder why it is loved so much. And, I wanted to teach many people the appeal of the farmhouse accommodation in Kuwanouchi district. For these reasons, I started this study.

I used literature, a questionnaire and an interview to solve this question.

As a result, I think that farmhouse accommodation is loved because it enables to do activities that people can hardly experience in real life. And, it has the effect that heals a person's mind. I hope that farmhouse accommodation plays an important role as a mediator between the city and the country in the future.

There are many things that we can do to spread the farmhouse accommodation in Kuwanouchi district. You shall teach someone the appeal of the farmhouse accommodation in Kuwanouchi district. Then you might be able to show your gratitude to Gokase town.

2、はじめに

五ヶ瀬町桑野内地区では、グリーン・ツーリズム事業の一環として農村民泊を行っている。この農村民泊を体験するため、毎年、宮崎県内や福岡県、熊本県など九州内からはもちろん、東京、大阪など国内、さらにシンガポールや中国など国外からも多くの人々が訪れている。また宮崎県内でも農家民宿の数、農村民泊体験者数は両方とも増加の傾向にある。私は今まで、学校行事で農村民泊を4回体験している。農作業のお手伝いや夕食作りなどの体験をしたり、受け入れ先の方に五ヶ瀬の話などを聞いたりたくさんのかんごを経験することができた。また農村民泊を通して、人の温かさにも触れることができた。「またあの温かさに触れたい！」と思い、個人的に農村民泊体験に行ったこともある。それくらい私も農村民泊に魅力を感じている。

私はこの農村民泊がたくさんの人に愛される理由は何かということに非常に興味を持った。さらに桑野内の農村民泊をより多くの人に伝えられたらと思い、このテーマで研究を進めていくことにした。

3、研究方法

- ・文献調査 → 長崎県立大学 上部沙佑美 2011年度卒業論文
「交流による自律した地域づくり
—宮崎県五ヶ瀬町桑野内地区を事例に—」
宮崎日日新聞 2013年9月22日付記事
- ・インターネット調査 → 農林水産省/ホーム
第5次五ヶ瀬町総合計画
- ・農村民泊体験 → 桑野内の黒板らくがき庄 後藤福光さん、フヂ子さん宅
- ・アンケート調査 → 農村民泊をしに来た方（76人）
本校生徒2～5年生（135人）
- ・インタビュー調査 → 夕日の里づくり推進会議会長 後藤福光さん

4、研究内容

〈第1章〉 農村民泊とは

〈第2章〉 農村民泊の現状

- (1) 宮崎県における農村民泊の現状
- (2) 桑野内地区における農村民泊の現状
- (3) 農村民泊体験

〈第3章〉 農村民泊を愛している人々の思い

- (1) 本校生徒2～5年生に対してのアンケートの結果
- (2) 農村民泊体験に来た一般の方に対してアンケートの結果
- (3) まとめ
- (4) アンケート結果からの考察
- (5) 《追加》文献調査

〈第4章〉 愛されている人々の思い

〈第1章〉 農村民泊とは

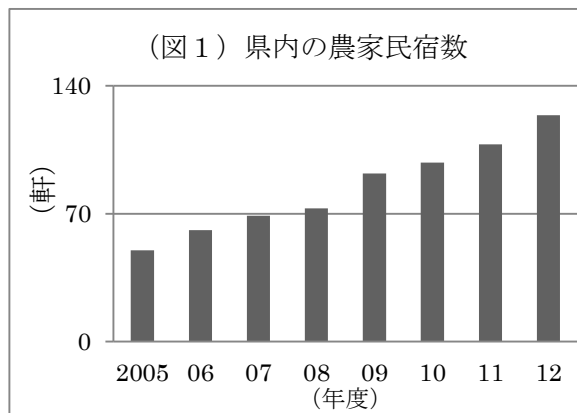
農林水産省によると、農村民泊とは、農林漁業体験活動を通じて農山漁村の人・もの・情報と深く触れ合うことができるもので、都市と農山漁村の人々を結ぶ懸け橋として、重要な役割が期待されている。農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動であるグリーン・ツーリズムの1つとして行われている。1970年代にヨーロッパの先進国のイギリス・フランス・ドイツで始まり、80年代から90年代にかけてイタリア、ギリシャ、スペインなどヨーロッパ全域に広まった。日本では1992年に本格的に普及した。グリーン・ツーリズムには、農産物直売所や観光農園なども含まれるが、特に農村民泊は、個人の営む小さな民宿から公設の大きな施設まで、様々な規模の

ものが含まれ、グリーン・ツーリズムの推進にとって欠かせないものとなっている。

〈第2章〉 農村民泊の現状

(1) 宮崎県における農村民泊の現状

現在宮崎県内で保健所に届け出た農家民宿の数は2003年の旅館業法で床面積などの規制が緩和されて以降、増加傾向にある(図1)。市町村や民間の6団体が主に宿泊の受け入れの窓口を担っており、11年度の体験者数は402人、12年度は554人に増え、本年度(13年度)は

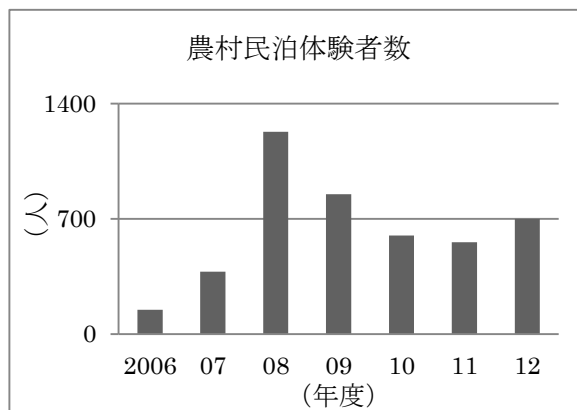


すでに昨年度の実績を上回り、583人となっている。県によると、九州各県に加え、九州新幹線開通でアクセスが向上した関西や中国地方からの訪問が増えているという。

(一部、宮崎日日新聞2013年9月22日付記事より抜粋)

(2) 桑野内地区における農村民泊の現状

1993年、農林水産省グリーン・ツーリズムモデル整備構想等策市町村全国25地域の一つに五ヶ瀬町が指定された。1995年に五ヶ瀬町グリーン・ツーリズム基本構想が策定し、桑野内地区で農村民泊が始まった。現在桑野内地区では10軒が農村民泊の受け入れをしている。体験者数は、08年度に1230人とピークを迎えたが、09～11年度は減少し、588人まで落ちた。12年度は少し回復し、700人と増加している。



数値提供：夕日の里づくり推進会議

(※(1)に書いてある11、12年度の県内の農村民泊受け入れ者数に桑野内の受け入れ者数は含まれていない。)



(3) 農村民泊体験

文献調査で農村民泊の歴史と現状について知ることができた。これらを踏まえて、実際にもう1度農村民泊を体験することにした。

日時 12月6日 17:00 ～ 7日 13:00 の1泊2日

場所 桑野内地区 黒板村らくがき荘 後藤福光さん、フヂ子さん宅

(この表では福光さんのことをお父さん、フヂ子さんのことをお母さんと表記している)

《1日目》		20:00	団らん みんなでこたつに入っているいろいろな話をする。お父さん、お母さんから聞く桑野内地区の昔の話やこの地区に対する思いは感動するもので、学ぶことも多い。
17:00	到着 「おかえりなさい」と、お父さんとお母さんが迎えてくれた。 	24:00	就寝
《2日目》		7:00	起床
17:10	夕飯の支度 五ヶ瀬町でできた食材を使って、お母さんに料理を教してもらいながら夕飯を作る。	8:00	朝食 起きるとお母さんが朝食を準備してくれていた。お母さんの手料理はやはりおいしかった。
18:30	夕飯 自分たちで五ヶ瀬の食材を使って作った夕飯。お母さんの味付けは最高だった。お父さん、お母さんと話しながらの夕飯は、実家に帰ったような感覚だった。 	10:00	掃除 季節が冬であるため、農作業ではなく、家事の手伝いをした。一日お世話になったお父さん、お母さんに感謝しながら掃除した。
		11:30	昼食
		13:00	出発 お父さん、お母さんともここでお別れ。「また帰ってきてね。いってらっしゃい。」と声をかけてくださった。

○農村民泊を体験しての感想○

到着したとき、お父さん、お母さんが「おかえりなさい」と迎えてくださった。我が家に帰ってきたような感覚だった。そのほかにも「また帰ってきてね」「いってらっしゃい」などの言葉に温かさを感じた。また、五ヶ瀬の食材を使ったお母さんの料理は、とても美味しく、優しい味だった。お父さん、お母さんとの会話も勉強になることばかりで、自分自身が成長しているかのような感覚だった。この農村民泊で人の温かさに触れることができ、我が家に帰ってきた時のような安心感を得ることができた。

〈第3章〉 農村民泊を愛している人々の思い

農村民泊体験に訪れている人はどのような体験をしているのか、また農村民泊をどのように思っているのかということを知るために、(1) 本校生徒2～5年生と (2) 農村民泊体験に来た一般の方に対してアンケートを行った。

【アンケート内容】

(生徒用)

1. 今までの農村民泊ではどのような体験をしましたか？
2. 農村民泊に魅力を感じましたか？ はい ⑤ ④ ③ ② ① いいえ
3. 2でなぜそう答えたのか理由を書いてください。
4. また農村民泊を体験したいですか？ はい ・ いいえ

(一般の方用)

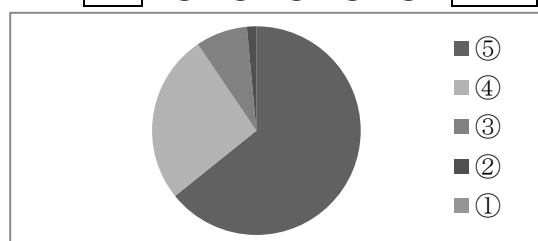
1. こちらの農村民泊は今回で何回目ですか？
2. どのような方法でこちらの農村民泊のことで知りましたか？
あてはまるものに丸を付けてください。
家族や友人から勧められて 情報誌 新聞・インターネット その他
3. 今回の農村民泊ではどのような体験をされましたか？
4. 農村民泊に魅力を感じましたか？ はい ⑤ ④ ③ ② ① いいえ
5. 4でなぜそう答えたのか理由をお書きください。
6. また農村民泊を体験したいですか？ はい ・ いいえ

【結果】

(1) 本校生徒2～5年生に対してのアンケートの結果 (回答…137人)

1. 今までの農村民泊ではどのような体験をしましたか？
2. 農村民泊に魅力を感じましたか？ はい ⑤ ④ ③ ② ① いいえ

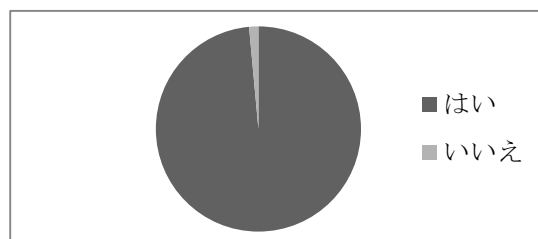
農作業・家事・農泊先の方と会話 など



3. 2でなぜそう答えたのか理由を書いてください。

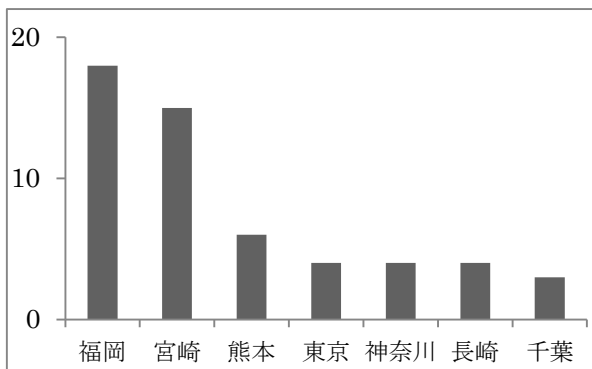
- ・第二の実家ができたから
- ・人の温かさを感じられた
- ・普段はできない体験だったから
- ・癒されるので何回も行きたくなる
- ・リラックスでき、疲れが取れた
- ・新たな人との出会いがあるから
- ・気分転換でき、元気になった

4. また農村民泊を体験したいですか？

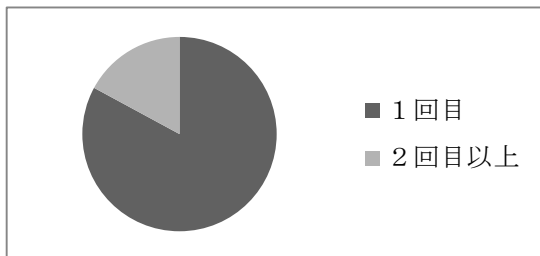


(2) 農村民泊体験に来た一般の方に対してアンケートの結果 (回答…76人)

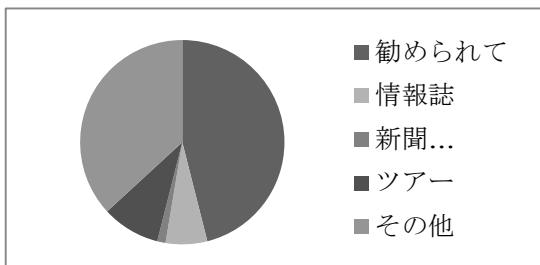
○居住地 (縦軸の単位 人)
(上位7都県を表示)



1. こちらの農村民泊は今回で何回目ですか？



2. どのような方法でこちらの農村民泊の
ことについて知りましたか？

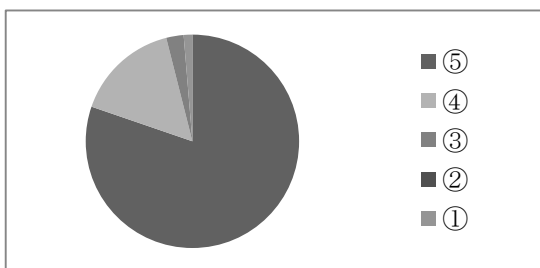


3. 今回の農村民泊ではどのような体験を
されましたか？

- ・農泊先の方と会話 ・神楽見学
- ・野菜収穫体験 ・町内探索 など

4. 農村民泊に魅力を感じましたか？

はい ⑤ ④ ③ ② ① いいえ

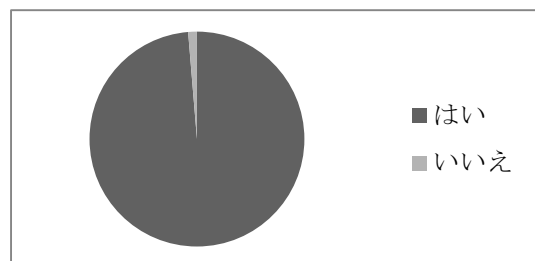


5. 4 でなぜそう答えたのか理由をお書き
ください。

※感銘する意見だったので書いていただいたものをそのまま掲載した。

- ・本当に実家に帰ってきたかのような安心感や落ち着きが生まれた。
- ・何もサービスしないおもてなしに魅力を感じた。
- ・受け入れてくださる家も大変でしょうが「出会い」は素晴らしいと思いました。
- ・都会から離れ、静かな自然に囲まれ過ごし、人生の中の「時間」のとらえ方が変わりました。忙しく、時間に追われ、慌ただしく過ごし、消耗した自分自身を癒すことができ、自分を大切に思えたので、また来たいと思いました。
- ・人間に帰れる。故郷に帰れる。故郷の大切さを学ぶ。
- ・お金では買えない魅力、価値、楽しさ、おいしさがいっぱいだから。
- ・普段では体験することのできない人の繋がりがややかさを感じるから。
- ・桑野内の風土とそこで暮らす人々がとても好きだから。
- ・いつも自分が新しい自分になることができ、心からリフレッシュされ、第二の故郷を持つことができるから。
- ・全く見ず知らずの人々との交流、なかなかできるものではない。

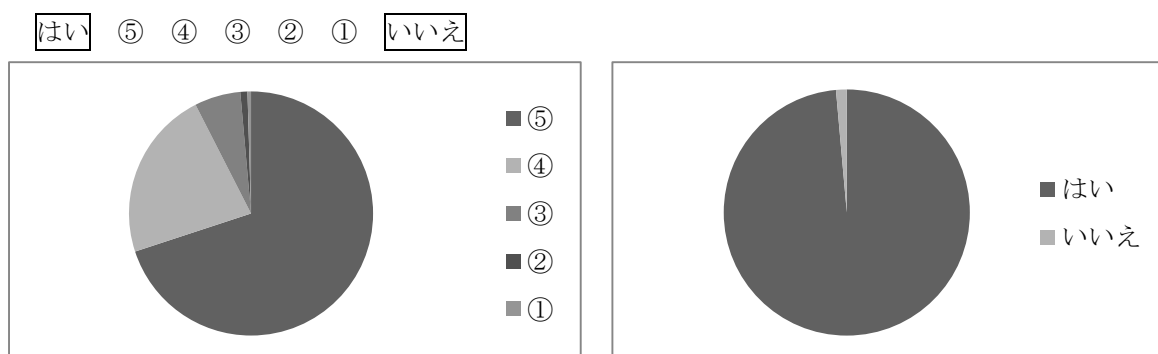
6. また農村民泊を体験したいですか？



(3) まとめ

○魅力を感じたか

○また来たいか



(4) アンケート結果からの考察

この結果から、農村民泊に魅力を感じている人が多いことが分かった。これはたくさんの自然に囲まれながら、農作業などの普段できない体験をできるから、また受け入れてくださる桑野内の方々が温かいからではないかと思った。アンケートで書いてもらった「魅力を感じている理由」で気になったことが一つある。それは、農村民泊が人々の心を癒すものとなっていることだ。なぜ魅力を感じたかという質問で、84%の人がリラックスできたから、疲れが取れたからと答えていた。東京や福岡などの都市在住の人もほぼこう答えていた。これは社会から離れて、これまでと違う、ゆったりとした環境の自然と人の温かさに触れながら生活することで、体験者は故郷に来たような、または家族と過ごしている時のような安心感を持てた。それによって体験者が自然とリラックスでき、疲れが取れたのではないかと考えた。こういう理由で農村民泊は愛されているため、最後の「また農村民泊を体験したいか」という問いに「はい」と答えた人が多かったのではないかと考えた。

(5) 《追加》文献調査

アンケート調査を踏まえて、本当に農村民泊が体験者の心を癒すものであるのか、文献調査で調べてみたところ、長崎県立大学の研究に答えとなるものがあつた。

長崎県立大学は、POMS (※1) という手法を用いて実際に農村民泊を体験した学生の精神状態の変化を数値化し、農村民泊の癒し効果を検証した。それによると、いずれの学生も「緊張」や「抑うつ」「疲労」「怒り」「情緒混乱」といった数値が農村民泊前より低下し、「活気」が上昇。つまりマイナス因子が低下しているため、心理的効果があるといえ、プラス因子が上昇しているため心理的健康状態がよりよい状態になっていることがわかったそうだ。また気分障害の大まかな指標として役立つとされている TMD (※2) の値も低下していた。この結果から、癒し効果が期待できると考えられる。

農村民泊は本当に体験者の心を癒すものであつた。

※1 気分プロフィール調査 (Profile of Mood States) : 質問に答えることで、気分の状態を緊張・抑うつ・怒り・活気・疲労・混乱の6因子が同時に測定できる検査。

※2 総合感情障害指標 (Total Mood Disturbance) : POMS に導入された指標であり、緊張・抑うつ・怒り・疲労・混乱の得点の合計から活気の得点を引いて得られた値。TMD の点数が高いほど気分・感情状態が好ましくない状態を示す。

〈第4章〉 愛されている人々の思い

農村民泊を体験した方々の思いを踏まえて、その体験した方々に愛される人々、つまり、農村民泊の受け入れ先の桑野内地区の方々はどのようなことを思っているのだろうかと思ひ、夕日の里づくり推進会議会長の後藤福光さんにインタビューを行った。なお、ここでは福光さんの思いをよりわかりやすく伝えるため、会話の内容を聞き書き形式でそのまま起こすことにした。

—— 農村民泊が愛されている理由は何だと考えていますか。

3つあると思う。1つ目は自然が豊かである。そして2つ目は夜神楽などの文化がいっぱい残っている。3つ目は一番大事なんだけど、素朴な人情が残っている。で、それが人々の心を打つっちゃないかな。自分はそういう地域が持っている総合的な教育力ってものが五ヶ瀬にあるって思ってる。ありのままの自然、文化、人情を武器にしていこうかな。

—— これからどうしたいと思っっていますか。

さっきあげた大事な宝物である自然・文化・人情、これを変えていきたくないね。農村のありのままの風景を楽しんでもらいたい。そういうのを楽しみたい人たちに来てほしいなと思う。じゃないと大事な大事な宝物の一角が崩れちゃうような気がする。崩れたら魅力も無くなっちゃうもんね。まあ、これからも都市と地方の懸け橋として頑張っていきますわ。

○インタビュー調査を通して○

福光さんの地域に対する思いがものすごく強いことがわかった。農村民泊が人と人をつなぎ、都市と地方の懸け橋になろうとしている。農村民泊がここまで愛されるようになったのも、福光さんをはじめとする桑野内地区の住民の方々の方々の地域をもっとよくしたいという思いからかもしれない。

5、考察

《農村民泊が愛される理由》

これらの調査から、私は桑野内の農村民泊は体験者から愛されていると確信した。体験者は農村民泊に何かしらの魅力を感じ、また訪れたいとも思っている。

では、なぜこんなにも農村民泊は愛されているのかと考えた時、主に2つのことを思い浮かんだ。

① 普段できない体験ができるから

アンケート調査で、魅力を感じている理由を「普段できない体験ができるから」と答えている人がいた。農家が減少している今、都市居住者は特に、農作業と無縁

の生活をしている。都市居住者にとって、農作業をすることは大変貴重な体験となっている。そんな世の中で、そこに滞在しながら農作業を体験できる農村民泊に魅力を感じている人がいると考えた。

② 心が癒されるから

アンケート調査で「心が癒されたから」「疲れが取れたから」という理由で魅力を感じたと答えている人が多かった。これは社会から離れて、これまでと違う、ゆったりとした地域のありのままの自然・文化・人情に触れながら生活することで、体験者が故郷に来たような、または家族と過ごしている時のような安心感を持つことができ、それによって体験者が自然とリラックスでき、疲れが取れたのではないかと考えた。これは、文献調査においてもそう考えることができた。また現代社会では人の温かさを感じる場面が少なくなってきたような気がする。日常生活ではあまり感じなくなった人の温かさを農村民泊で味わうことができるため、心が癒されるのかもしれない。

《これからの農村民泊》

上記のように桑野内の農村民泊は愛されている。農村民泊は体験者の心を癒すものとなるため、精神病を治すことも期待できるだろう。またこの農村民泊は都市と地方の格差を縮めることが可能であると考えられる。都市居住者が地方に農村民泊を体験しに訪れることで、その地方に経済効果があることはもちろん、気に入った人が都市から移り住むと、地方の活性化も可能になるのではないかと考えた。農林水産省も都市と農山漁村の共生をめざしているため、農村民泊を推進している。これからの農村民泊も都市と地方を結ぶ懸け橋として重要な役割を果たすはずだ。

五ヶ瀬町は今、人口が減っているとともに、少子化で若者が減るという現状がある。また、五ヶ瀬町が新成人に対して行った、「五ヶ瀬町に足りないと思うもの」「これからの五ヶ瀬町はどのような町になってほしいか」を尋ねるアンケートでは、どちらの項目も「人でにぎわう観光のまち」と答える人が多かったそうだ。(第5次五ヶ瀬町長期総合計画より引用) つまり、五ヶ瀬町が観光でにぎわってほしいと考えている人が多いということだ。そこで、この農村民泊を主要観光資源にすると、観光客がたくさん来るようになり、五ヶ瀬町の活性化も図れるのではないかと考えた。

桑野内の農村民泊をさらに広める方法はないか、私なりに考えてみたところ、3つの方法を思い浮かんだ。

① 桑野内農村民泊のホームページを作る

これまでなかった桑野内地区の農村民泊のホームページを作り、農村民泊の内容や受け入れ先の方の紹介などをするというものである。桑野内の農村民泊の内容などが伝わりやすく、いつどこが空いているかなどもホームページでチェックできるようにすれば、予約確認などもしやすいという利点がある。しかし農作業と農村民

泊をやりながら、ホームページを管理するのは手間がかかる。また誰が管理するのかというのも問題となる。

② 農村型ワーキングホリデー制度を利用したツアーを開催する

農作業や神楽など人手が足りず忙しい時期に宿泊費無料である分、仕事のお手伝いしながら、ゆっくりと滞在することで町民との交流を深めながら、五ヶ瀬町の良さを知ってもらおうというものである。西米良村が現在このような取り組みを行っている。長所として、若い世代（20代～30代）の方も体験しに来るようになるということのほか、農作業で忙しく、人手が足りない時も対応できるということがあげられる。しかし宿泊費が無料であるため、金銭的な問題が浮上する可能性があるほか、農作業初体験の方が来る可能性があるため、農業経営の効率化に寄与しない可能性もある。

③ 体験者が情報発信する

農村民泊を体験した人が体験の感想や素晴らしさを家族や友人などに伝えるというものである。これは最も容易で、アンケート調査で家族や友人に勧められて体験しに来た人が多かったように、最も影響力が強く、効果があると考えられる。またこれは私たち学びの森の生徒にもできることである。私たちが地元に戻って、両親や友人に農村民泊の素晴らしさを伝えるだけで、農村民泊を愛することとなる人が増えるかもしれない。

6、おわりに

研究を進めていく際、後藤福光さんをはじめとする桑野内地区の方々に協力してもらった。協力してもらうたびに、桑野内地区の方々の温かさに触れることができた。またあの「おかえりなさい」という声が聞きたくなった時、あの温かさに触れたくなった時、私にとって大事な故郷である桑野内に帰りたい。五ヶ瀬に来て5年が経とうとしている。たくさんお世話になった五ヶ瀬町に少しでも恩返しできるよう、自分にできることを考えて、あと1年間生活していきたいと思う。

7、参考文献

- ・長崎県立大学 上部沙佑美 2011年度卒業論文
「交流による自律した地域づくりー宮崎県五ヶ瀬町桑野内地区を事例にー」
- ・宮崎日日新聞 2013年9月22日付記事
- ・農林水産省/ホーム <http://www.maff.go.jp/>
- ・第5次五ヶ瀬町総合計画 <http://www.town.gokase.miyazaki.jp/g-plan/>